

「町制施行50周年・ 宗谷管内移管記念」シリーズ

No. 7 殖民軌道と簡易軌道（後編）

「殖民軌道と簡易軌道」後編は、前月号に続いて問寒別線について掲載します。

○村営簡易軌道

問寒別線は殖民軌道として建設されましたが、昭和21年に北海道第2期拓殖計画が終了したので、簡易軌道と名称を改めました。

昭和27年（1952）、村は簡易軌道問寒別線の公共性と重要性を考え、軌道の運営管理に直接携わることを決意し、北海道開発庁と北海道庁の斡旋で天塩鉱業(株)と交渉し、9月1日から幌延村営軌道として営業を開始しました。

村営になった頃の軌道には、7t車1両、5t車3両、1t車1両のガソリンカーが配備されており、所長、事務員4名、労務員19名が運行に携わっていました。軌道施設の主要部分のほとんどが天塩鉱業(株)の投資によるものであったので、村が天塩鉱業(株)に1,533万円を支払うことで協議が成立しました。

村では、簡易軌道管理条例を制定し、諮問機関として「簡易軌道管理委員会」を設置しました。会計は特別会計として、専任職員所長以下25名を配置し、事業の運営に当たらせました。

昭和27年、軌条648.9mを交換し、昭和28年には輸送力を強化するため企業債350万円で7tディーゼル機関車1両を導入、昭和29年には企業債400万円でロータリー式排雪車を導入し、この年から地域住民が待望していた冬期間の運行を開始しました。

問寒別地区の開拓が進むにつれ、沿線の農家戸数も徐々に増えつづけ、乗員人員、農産物や農業関連資材の輸送量も増加し、それに幌延鉱業所の石炭や北大演習林から伐り出される木材などが加わり、軌道は地域の大動脈となりました。



村営簡易軌道営業開始記念（昭和27年）

○営業不振から廃止へ

軌道の運営はしばらくの間は順調でしたが、昭和31年（1956）12月、全機関車が格納されていた車庫が失火により全焼し、機関車のすべてを失いました。1,200万円の企業債を借入れして、ようやく再建の見通しがついたと思われた昭和33年、幌延鉱業所が閉鎖され、軌道の主要貨物であった石炭の輸送業務を失うことになりました。収入は著しく減少し、従業員の削減をはじめとする経営の合理化を進めましたが、再建の道は厳しい状況下にありました。

日本経済の高度成長に伴い農村地域の過疎化は進み、問寒別地区でも離農が相次ぎ、沿線住民は激減しました。さらに自家用車の急速な普及により、軌道利用者は年とともに減少していきました。町は徹底した合理化を図り、最終的には軌道従業員はわずか4名になりました。

昭和43年（1968）3月、軌道と平行して走る上問寒・問寒別停車場線の道々昇格が決まると、道路改良が進み、冬期間の除雪も実施されることになりました。これによりバス運行が可能という見通しがついたことから、町は昭和46年5月31日に軌道運行を廃止し、7月3日に「町営簡易軌道問寒別線廃線式」を行いました。同年6月1日から簡易軌道の代替として町営過疎バスが運行を開始しました。



簡易軌道問寒別線廃線式（昭和46年）

このシリーズに関するお問い合わせ又は新幌延町史（平成12年発行、1冊5,000円）の購入希望の方は、下記にご連絡ください。

お問い合わせ先 総務課企画振興グループ 電話5-1111（内線222, 223）